第471号 昭和59年 9月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年 8月31日 第三種郵便物認可

1984年（昭和59年）
9月号（No. 471）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

カンチェンジュンガ登山隊
登頂報告会 ……（1）
八十周年記念募金の件 ……（1）
海外の山 ……（2）
横範的冬季登山
八十周年記念晩餐会開催について
八十周年集会分科会 ……（3）
ネパールの山岳博物館
建設についての試案
川喜田二郎 ……（4）
第12回　山岳史懇談会
図書委員会 ……（4）
山頂に避雷針を設置することは
難しい ……（5）
東西南北 ……（5）
図書紹介 ……（6）
「山と猟師と焼畑の谷」「アルプスの名峰」「富士講の歴史」「佐貫亦男のチロル日記」「ヒマラヤ文献目録」
お知らせ ……（10）
会務報告・ルーム日誌 ……（12）
八十周年記念募金応募者芳名 ……（12）
新入会員・会員住所等変更 ……（13）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

カンチェンジュンガ登山隊
快挙をなしとげ無事帰国

盛大に登頂報告会

報告する鹿野隊長／撮影・松家　晋

カンチェンジュンガ登山隊は、（社）日本山岳会、創立八十周年記念行事のひとつとして企画、実行された。そして六十九日にわたる苦闘の結果、南峰、中央峰、主峰の三峰の縦走とさらに七八〇〇メートルからのハンググライダーの飛行に成功ししかも無事故という輝しい記録を残してこのほど帰国した。

その登頂報告会がさる七月三十日、東京市ケ谷の自治労会館ホール（千代田区六番町一）で、聴衆約二百人を集めて盛大に行われた。

報告会は午後六時三十分より、神崎忠男総務担当理事の司会により、まず佐々保雄会長の開会の言葉についで西堀栄三郎前会長並びに橋本龍太郎登山隊総隊長の挨拶ののち、鹿野勝彦登山隊長の報告となった。

鹿野隊長報告の要旨

八千メートル級の縦走という非常に大それた目標を掲げて出かけまして、まあ点数でいうと六十五点ということになるかなあという感じで帰って参りました。

日本山岳会は八十周年と申しますが、日本のヒマラヤの歴史は五十年弱であります。ナンダコット、マナスル、一九七〇年のエベレスト、一九七六年のナンダ・デビィの縦走と続くわけですが、われわれがナンダ・デビィが終って次は八千メートルの縦走をやろうということで、インド登山財団に話しかけたが残念ながらものにならなかった。

今回の計画はだから別に約二年ほど前から始めた。

カンチェンジュンガは世界で三番目の高度をもつ山であります。主峰、南峰、中央峰、西峰の四つのほぼ八五〇〇～六〇〇メートルラインにつながるピークが並んでおり、その間の距離が約三キロ。ナンダ・デビィに較べて大きさにしろ、技術的な問題そして超高度での生活ということで酸素とかいろいろ困難な問題が出て参りました。

最初の一年ぐらいはどんな形でやろうかと考えておりました。ところで技術的な問題も当然そうですが、やはり資金の問題も大きなネックになっていまして、これがいけるという確信をもちましたのはちょうど一年半ぐらい前で、日本テレビの方で後援がいただけるという話が決定し、本格的に動き出したのが一九八三年に入って早

八十周年記念募金の件

会員各位殿

八月末日応募状況の概数を申し上げると、応募会員数、約一一〇〇名（全会員の二七パーセント）、申込口数、二九四〇口、金額、一五〇〇万弱（目標額の七三パーセント）です。詳細は別報しますが、募金に寄せられた御支援厚くお礼申上げます。

なお、八月末日にて一応〆切りましたが、二次乃至追加募金につき目下検討中であり、更めて引きつづきお願いすることになりますので何卒宜しくお願い申し上げます。

記念事業委員会

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

お知らせ電話 234六六五九

々だったわけです。で、それから隊の編成に入りまして、細かい計画をつめていく上でいろんな要素が出て参りました。そのひとつは、今までK2の七六〇〇メートルの記録はあるが、それを八〇〇〇メートルラインを越えた所からハンググライダーを飛ばそうという計画でした。それに八〇〇〇メートルの縦走という、今までに例のない計画を二つ重ねたような隊になったわけです。それを何とかこなしてみようということで、多少の不安はないではなかったが、まわりの方々からいろいろ心配をしていただきました。必ずしも順調に準備ができたというわけではなかったが、とにかくかなり強引に計画を進めて参りました。この間、大変に多くの、数えきれないぐらい大きなご協力をいただきまして、ようやく出られることになったわけです。

隊員の構成は日本人三十九名、ネパール人三名、計四十二名という非常に大きな隊になりました。

いまここに全員がきておりませんが、本日ここにきているわれわれの仲間を紹介したいと思います。（順不同）

橋本龍太郎総隊長、岩下莞爾（日本TV）、重広恒夫副隊長、平野隆司、小原俊、丸尾祐治、賀集信、寺本正史、小林政志、三谷統一郎、松沢哲郎、三辺夏雄（マネージャー）、飯田肇、大谷直広、北村貢、大谷亮、尾崎隆、林田康明（ドクター）、磯野剛太、広川健太郎、佐々木慶正、追田泰敏

以上、出席していないもの、まだ二名帰国していないものを含めて日本人の隊員は三十九名。あとネパール側にアン・ツェリン、ナワン・ヨンデン、ニマ・テンバの三名がおりまして、その三名がそれぞれ南峰、中央峰、主峰に登頂してくれました。そのほかサーダーのハクパ・テンジン以下ネパール側のスタッフが四十二名、それからリエゾンオフィサー、ネパール政府の連絡官二名、計八十三名という大世帯になりました。

次いで、重広副隊長の説明によるスライドが映写された。

スライドの枚数は約八十枚。カトマンズからヒレ、キャラバン開始、ベースキャンプ、ABCそしてハンググライダーヒマラヤンアタック号の豪快な飛翔、中央峰、主峰、南峰の縦走、登頂、西峰の断念など美しくも生々しい山行記録の展開に皆、目を見張った。

鹿野隊長のまとめの要旨

スライドではわかりにくかったと思うのですが、それだけ登山が複雑であったということです。南峰、中央峰、主峰と一応辿ったが、西峰を登り残した点、それからハンググライダーも八〇〇〇メートルにベースを、三日に四五〇〇メートルにアドバンス・キャンプをそれぞれ建設した。同隊のルートはメスナーが開拓した東面の「チロリアン・フェース」ルートに沿ったもので、この下部の岩場には五〇〇メートルの固定ザイルをフィックスし、五日に五六五〇メートル地点にC1を建設。

その一週間後に、同隊はアクシデントに見舞われる。記録映画班のヤウオルスキ隊員は、固定ザイルが落石で切断されていたため百メートル転落して死んだ。遺体はただちに搬出され、ツラギ氷河に埋葬された。同隊員はエベレスト、ダウラギリなどに足跡を残しているベテラン登山家であった。

十二月十六日、通称「バタフライ」の部分にC2（六四〇〇メートル）、二十一日にC3が七一〇〇メートル地点に作られた。しかし十二月末の強風雪でC3は二度にわたって倒されている。翌八四年の一月十一日、ベルベカとガイエウスキの両隊員はC4を七七〇〇メートルまで進展させ、十二日、五時間で頂上を踏んだ。頂上の下三十メートルの地点で、韓国、ネパールの国旗を拾い、C3には午後七時に帰着したが、両隊員とも凍傷にやられた。第二次登頂隊が派遣されたが、C4は吹き飛ばされており、この遠征もその時点で登山を中止した。冬季の登頂はこれが最初で、チロリアン・フェース・ルート沿いの登頂は三度目。酸素、高処ポーターの使用は一切なしの快挙であった。

入山の期日を規制し、厳冬季登頂の期間を限定するなど、当世、山も登りにくくなったが、公式の冬季登山記録を求めるなら、ルールは尊重されなければならない。

（片山　全平）

海外の山

模範的冬季登山

ことしの夏は減法暑かった。違和感がないでもないが、冬仕度にと冬季登山の話題を―一九八三・四年のネパールの冬季登山シーズンは稀有の好天に恵まれ、この季にポーランド隊が模範的なかたちでマナスルの冬季初登頂を果したと「マウンテン」誌は報じている。とかく問題となる登山活動開始の時期、厳密な意味での冬季登頂時期という点で、とかく物議をかもしがちだったが、この隊の場合は、一九八〇年に冬季の登山シーズンが設定されてから、もっとも適当であるという評価なのだ。

天候状態は一九八三年の十二月二十五日まで快晴に恵まれ、二十六日に少々の降雪をみたが、その後数日間大荒れとなり、そのあとの八四年一月三十一日までは快晴だったという。しかし、高度に応じた風速については何も触れていない。

隊は、ポーランドのザコパネの尖鋭的登山クラブ。隊長はレチ・コルニスゼウスキ。十人で編成されている。同隊はルールにより、十二月一日以前にはツラギのベース・キャンプを建設しない。また登頂攻撃も十二月二十一日以前には行わない、などを申し合わせ、この方針に従って行動計画を立てた。

一行は十二月二日、四〇〇〇メートルにベース

ルを越えなかったことが残念であった。そのため六十五点と前に言ったわけです。登山期間は六十九日で長かったが、力一杯やってすべてを出しつくしたという感じがしています。なお、大規模の登山隊に見えるが、各ルート別に見れば八名程度であるからそれなりに大変だった。

また、若い隊員がかなり多く、頂上に立ったりあるいは長い登山期間の中でじっくり力をつけてきたので、今後が大いに期待されると思うが、その意味で日本山岳会八十周年行事としてはふさわしいものであったと思う。いずれ正式報告書で詳しくお知らせします。

岩下チーフディレクター談要旨

報道関係としては、完全なフォローはできなかったが、計画の七〇%ぐらいは出来たと思う。商業放送という制約からハンググライダーということで協力しました。

放送は八月八日、九時二分より。題名は『冒険野郎氷壁に舞う―翔んだ！　登った！　八〇〇〇㍍』。

内容的にはハングに絞っているが、やはりそこまで立つということは、これは登山ということである。それには大変な協力をいただいたわけです。（以下、スタッフ紹介）

質問には気象とかもう一度行ったとしたらどういうやり方をするのかというものまで飛び出した。さらに各隊員の担当別の感想も披露された。それによると只野氏は飛ぶときよりABCの一週間の待ちの方がむしろつらかった。ハンググライダーの飛んだのは十七分間。ドクターの賀集氏によれば、呼吸器障害が多かったとのこと。食事はまずかったと言う者が数名あり、食糧担当の小林氏が素直にあやまって、爆笑がわいた。

最後に、この計画に陰になり日なたになって協力した宮下秀樹氏への称賛の拍手がおくられ、閉会の辞は田口二郎副会長。

日本山岳会創立八十周年
記念晩餐会開催について

近年、支部交流をひとつのテーマに活動してきたなかで、会員と会員、人と人、心と心のふれあいの大切さを知り得ました。

この考え方を、ぜひ、八十周年事業に生かしたいと、いくつかのブロックで記念晩餐会を開くことになりました。会員一人ひとりが自覚の上にたって八十周年に参加し「自分たちで、自分たちの山岳会づくりをするんだ……」という考えのもと、会員同志が集い、語らい、正しい考え方のなか自分たちの日本山岳会を正しく理解して新らたな時代へ旅立ちたい。今、その一節が八十周年の意義とも考え次の通り、各都市にて記念晩餐会を開きますので、近在会員、または交流希望の会員が日本各地より出席下さいますようお願いいたします。

八十周年記念晩餐会開催日程一覧

	開催地	会期	会場
1、	大　阪	昭和五十九年十月二十七日（土）	梅田　第一ホテル
2、	名古屋	十一月十七日（土）	名古屋郵便貯金会館
3、	福　岡	昭和六十年三月三日（月）	都々志会館
4、	仙　台	五月中旬	未　定
5、	長　岡	六月十五日（土）	長岡東山八方台休暇センター
6、	札　幌	七月	未　定
7、	富　山	八月	未　定

これら二つの記録はともに八〇〇〇メートルのヒマラヤに上った世界的な快挙である。しかも無事故。それにもかかわらず実にたんたんと報告する鹿野隊長、そしてスライドで説明する重広副隊長、そこには全く気負いはなかった。だがそれとは対象的に聴衆の方が興奮ぎみで、会場は熱気に溢れていた。終了は午後八時四十五分。

（小倉　厚）

△日本山岳会カンチェンジュンガ登山隊'84の仮レポートを頒価五〇〇円（送料別）でおわけしております。事務局に申し込んで下さい▽

なお、開催に当っては会報「山」等でその都度詳細にご案内申し上げていきますが、記念講演会や、記念山行が一緒に実施されるところもあります。

会員皆様が参加することにより、その都市都市で開かれる記念晩餐会を盛り上げて下さい。会員であればどこの都市で開かれる晩餐会でも、また何回でも出席出来ますのでご来席いただけますよう重々お願い申し上げます。

＊

創立八十周年
記念晩餐会（大阪）の
ご案内

日本山岳会八十周年と同時に、関西支部五十周年にも当り、意義の大きい記念晩餐会を開きます。

日本各地七都市（七ブロック）で開催する記念晩餐会の初めとして、関西支部、山陰支部の共催で次の通り開きます。

記

一、日時　昭和五十九年十一月二十七日（土）午後五時
一、会場　梅田第一ホテル
一、行事
　1、講演会　午後五時
　「日本山岳会八十周年記念カンチェンジュンガ初縦走」
　講師　重広恒夫
　　和田城志
　2、晩餐会　午後六時半
一、会費　一〇、〇〇〇円
一、申込み　十月一日までに次のところへ電話でお申込み下さい
　桑田　結　078-851-0291（関西）
　井上豊重　08582-6-5559（山陰）
　日本山岳会事務局　03-261-4433

＊

創立八十周年
記念晩餐会（名古屋）の
ご案内

次の通り、八十周年記念晩餐会を、開催いたします。

記

一、日時　昭和五十九年十一月十七日（土）午後四時
一、会場　名古屋郵便貯金会館
一、行事　1、講演会　午後四時
　2、晩餐会　午後六時
一、会費　未　定
　詳細は後日ご案内させて頂きます。

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

—第十二回—

山岳史懇談会

図書委員会

三月十日の一夕、今西錦司さんと西堀栄三郎さんをお招きして、大正末期の第三高等学校山岳部のお話をうかがいました。なにしろお二人の顔合わせだけでもちょっとしたセンセイションですから、会場は超満員、ルームの椅子を総動員しても〝立見〟が出るありさまで、芳名簿記帳者四十二名の倍以上は出席されたようです。どこで聞きつけたのかNHK取材班がカメラ一式を持ってあらわれ、一部始終を収録していきました。

西堀さんの提案で「三高当時は兄貴分である」今西さんが主に話し、西堀さんが補足するという形をとったのですが、この〝主〟と〝補足〟とのカケアイが実に絶妙で面白く、お二人の異質な個性が渾然として、いつしか一つの豊かな世界が織りなされました。

今西さんは話題を『三高時代の思い出から』としました。「〝から〟というのは、思い出全部をしゃべったらキリがないので、そのなかから思いついたことをしゃべる」というわけです。一応は三高に入学した一九二一年から三年間の山岳部生活を「非常にクロノロジカルに」語るというタテマエなのですが、これがなんとも融通無碍なクロニクルで、お話はあちこちへと変幻自在に展開します。そこがまた実に面白いのです。

そもそも人間の行為が〝歴史〟になってしまうと、同時代の当の主役よりも、後世の歴史家のほうが詳しく知っているという、おかしなことが起こるものですが、登山史にあってもこの辺の事情は変わりません。しかし同時代人の強みは記録にあらわれない雰囲気を肌で知っていることです。今西さん、西堀さんのお話も、このような雰囲気、黎明期の学生山岳界の青春像を肉声で伝えてくれる、貴重な史談となりました。

そんなわけで、お話の具体的な内容を要約するのは大変むずかしくて、やってもつまらないのですが、比較的大きなスペースをとったのは次のような話です。

黎明期のスキー話と、関温泉でのスキー合宿で、いつも同宿の慶応山岳部と張り合った話。

カツ丼の発祥地は信州松本であり、関東大震災で京都に流れてきた横浜の飲食業者に松本直伝のカツ丼の作り方を教えてやった話。

「技術の権化」西堀さんの驚異的で情熱的な道具作りの話。

「今西、西堀は京都一中時代からいつでも一心同体みたいにしてどこへでも一緒に行ってやってきたんですけれども、そういうふうに言うとまるで同じような人間かと思われるかもしらんが、これほど違うた人間はあんまりおらんですな」という話。

京大時代の岩登り、ダンシングクライミングの極意の話。

当時熟読した登山技術書の話。

三高山岳部が校庭の松の木をこっそり切り倒しては焚火の練習をしていた話……等々。

登山史に関する金作谷初下降について質問すると、岩魚釣りの話が返ってくるし、積雪期北岳初登頂の思い出を聞けば、カモシカを「体中全部食べようということになって」キンタマまで食ったけれど、一番うまいのは骨の髄だったという話になるなど、じっくりと醸成された大長老の山岳史談に、山ばなしの楽しさを久しぶりに味わいました。

出席者・順不同（記帳者のみ）

田口二郎、菅野弘章、山村正光、大橋晋、阪上義次、安江安宣、三栖寿生、近藤保人、油谷次康、高沢英雄、入谷浩右、柿原謙一、平井吉夫、泉久恵、網倉志朗、宇津力雄、佐々保雄、加藤比呂志、周布光兼、島田巽、北村元三郎、近藤信行、織田沢美知子、藤原南、中西豊和、三島昌夫、平戸孝夫、古川汀也、原謙一、滝川清、神戸恵子、土井高夫、後藤一安、渡辺兵力、岩瀬晧祐、北島光子、高沢光雄、武田満子、山本良三、広羽清、山口節子、平井拓雄、久保孝一郎、山崎安治　（平井吉夫）

ネパールの山岳博物館建設についての試案

川喜田二郎

ネパールの山岳博物館建設については、NMA（ネパール山岳会）関係者より日本の登山界（日本山岳会、日本山岳協会、HAJ、労山等）に対し、数千万円に及ぶ多額の金品の協力要請がでているようであるが、私はヨーロッパの山岳博物館に見られるような、有名登山家の装備品、頂上の石、地図、写真などを展示するだけでなく、発想をかえて、登山関係だけを対象とするのではなく、山岳環境の保全や、山岳に関する総合的情報センターとしての機能ももち、またヒマラヤに関する科学研究者にとっても、学習の場として利用できるような博物館を作ることにしたらどうかと思う。

ネパール側は土地を提供するだけでよく、マネージメントは日本から学ぶことにし、中味はボランティアの自発的サービスにたより、何もないところからスタートし、一切ボランティアの力で作りあげていくことにしたらと思う。

現在ネパールへは、年間数万人が（日本人ばかりでなく）訪れている。この中で、山岳博物館のために労力奉仕してみようとか、物品で協力しよう、資金の面で協力しようという人が、一%でもいるとすれば、何百口にものぼるだろう。そういう人たちが行ったついでに何か寄与するという方式である。そうすれば、後は、ネパール側のマネージメントさえ宜しきを得れば、山岳博物館は、自然発生的であるかのように完成に向けて進行していくのではあるまいか。

このようにして作った博物館ならば、ネパール人にも、外国人にも生きた博物館として利用されていくのではあるまいか。

また、かりに山岳博物館が、このようにボランティアの力の結集で出来た暁には、次の目標としてはより大きな、ルンビニの復興をとりあげることができるかも知れない。少くとも、側面的には考えられると思う。そもそも、お釈迦様の心はそういったやり方で、ルンビニを作って欲しいと内心思っておられるのではないかとも思っている。

（日本ネパール協会会長）

山頂に避雷針を設置することは難しい

「山」四六五号掲載の「被雷を防ぐための規制措置を!!」「落雷はどの程度予知できるか」記事に関し、会員大西康郎氏より次のような意見が寄せられた。

「前略、会報〝山〟五月号拝読致しました。表題の松田雄一氏、北川信一郎氏の稿を読み、思いつきですが、尖頂の山、槍ケ岳等には避雷針を建てたらどうかと考えました。素人で正確には存知ませんが、露出部三～四米高あればとも思いますし、二十平方米に何十人か集る槍ケ岳山頂などでは効果あるのではと考えます。費用と美観の問題がありますが一度研究してみるべきではないかと考えました。よろしくご検討お願いします」

＊

これに対し埼玉大学工学部教授の北川信一郎氏に検討方お願いしましたところ、次のような回答が寄せられましたので、ご参考までにお知らせします。

「前略……大西康郎氏のご意見については有効に働く避雷針を槍山頂に設置することができればその通りですが、実際は有効に働く避雷針を設けることが出来ないというのが解答になります。

避雷針は落雷を誘引する突針と雷電流を安全に大地に流す引下導線と接地装置からなっていて、総合接地抵抗は一〇Ω以下でないと有効に働きません（JIS規格）。槍山頂のような岩地では突針と引下導線は設置できても、接地抵抗を一〇Ω以下にする方法がありません。突針と引火導線だけでは、落雷に対しては、一本杉や同じ高さの竹竿と同じ働きしかありません。

たしかに落雷は三～四米高い突針の先端に吸収されますが、近くに人がいると、人体は雷放電の良い通り路ですから、一本杉の下に雨やどりの人がいると杉の木におちた雷電流の主流が人体に移行するのと全く同じ現象がおきます。

良好な接地をとるには下の沢まで引下導線を引かなければなりませんが、そうすると引下げ導線が長くなるので、総合抵抗は一〇Ω以下になりません。

槍山頂に限らず、岩山の山頂に有効な避雷針の設置は困難です。岩は一般に不良導体（絶縁体）ですが、私の記事のように落雷のおき易さは、導電性には関係なく、地上から雲に向って突き出ている形状できまります。

岩山の頂上に有効な避雷針を立てることが不可能事に近いので、どこでもこれで事故を防ぐ対策としようという計画が立てられないわけです。

北川信一郎」

東・西・南・北

感激!!上高地の山開き

—38回ウェストン祭にて—

坂倉 登喜子

島々谷はいつに変らぬ緑美しい光の中、ニセアカシアの香りに満ちた輝くばかりの自然の姿で、また、今年も私たちを迎えてくれた。

去年の台風と豪雪の爪跡が残る渓すじは、営林署や山小屋主の手で補修されたのか、幾ケ所かの高捲きや新しい橋が架せられてあり安全に歩くことができたことを、感謝しながら登った。珍らしいヤマシャクヤクやサンカヨウなどの花々の写真を撮ったりして谷を遡り、いつもより楽に峠に立った。

そこにはウェストン氏も、槙先生も、そして総ての登山者が感銘した、残雪豊かな穂高連峰が青空をバックに壮麗な姿をぱっと現わしていた。私は毎年峠越えをしているが、今年ほど鮮明で残雪の多い姿を見たことはなかった。

思わず涙ぐむ友もいた。私は萬歳を叫んだ。峠へ登ってきた二人のカナダ人に、ウェストンさんの越えた峠の話をしたら、嬉しそうに、明日穂高へ登るのだと握手をして下って行った。私たちも北面の残雪を踏んで無事下山、梓川沿いに上高地に近づく頃、会長を迎えに行く山田副会長と鳴原氏に会った。そこで七十七歳の佐々会長が峠を越えられたことを知り、三つも私より高令の会長のお元気さに驚く。なぜ日本山岳会の会員たちが峠越えをして、ウェストン祭に参加しないのか不思議に思えた。

後発隊の若い女性たちは夜行で峠越えをして翌日のウェストン祭でコーラスの奉仕をするのを恒例としているが、ウェストン氏の越えた峠越えをしてこそ参加の意義があるのではあるまいか。

翌三日の碑前祭では、佐々会長がウェストン資料館の話を発表して下さり、思わず感涙、ウェストンの北アルプス発見があってこその上高地、その業績を讃えることこそ、師にむくいる行事ではないかと……、私は常々考えていた。

終了後の懇談会でも佐々会長は環境庁所長にも賛同を得られ、信濃支部来年度事業に、ウェストン資料館設立計画をと、再び発言され、私としては感激のウェストン祭となり、上高地の山開きとなった。

山の鎮魂歌

—第二十六回慎太郎祭 針ノ木大雪渓にて—

清水 悟郎（信濃支部所属）

山を想えば人恋いし
人を想えば山恋いし

ああ、山訪う人を出迎え
また見送りつつ、
大人が孤独の魂の中に
生涯静かに燃え続けた、
山小屋の榾火のように
温かく身にしむ言葉よ。
その言葉 碑(いしぶみ)深く、
否人の胸深く刻まれて、
ごらんください、
その証(あか)しのように、
あなたが夏冬何百回ともなく

踏まれて、
そして下には大沢小屋、
上には峠の小屋、
足跡がどこかに残っているような針ノ木大雪渓に、
あなたを偲んでは山想い、
人恋いながら、
友人・夫婦・親子語らって、
また一人で、
固い約束のように方々から
集って来ています。
そして、ちょうどあなたの
父君が、
七十二歳で初めて蓮華頂上を極め、
「山っていいもんだなあ」
と言われたというように、
みんな、みんな
魂の満足にひたりながら、
「よし来年も再来年も」
と心に約しているのです。
慎太郎大人よ、
そうではありませんか、
登山とは一歩また一歩、
高みへ頂上へと、
わが身、わが魂を励ましつつ
登り行くこと、
そして天地と合体する思いに
満足すること。
わらじばきで歩いて来た
昔なつかしい山道も、
いつしか旧道となり、
廃道となり、
バスも車も
途中まで来ていますが、
一歩山道へと入れば
衣笠草、白根あおい、
尾根路の岩間には駒草、
うす雪草、
この雪渓の下にも
固い蕾がきっとあります。
雷鳥は這松の下で卵を抱き温
め、かもしかは岩蔭で乳をふく
ませ、高山蝶は県境を越えて飛
び交い…
それらはみんな宇宙の
銀河系の大事な宝、
都会文化、
技術文化の時代が進んでも、
山想い人恋う人は
減りも無くなりもしません。
それらの人はみんな友だち同志
固よりまたあなたの縁深き
山恋うる友、
どうぞ見守ってください、
あなたの友らを。

山日記第一輯の頃
―遺稿―

角田　吉夫

山日記一九五二年版は第一輯より何冊目に当るだろうか。

僕と山日記との関係は、一九三〇年第一輯が編輯された時から約十年間続いている。その頃から芝虎の門の不二屋ビル四階にあった日本山岳会のルームで、山日記の編輯にたずさわった時間は、僕の長い山行の日数よりはるかに長かったと思っている。

松方・藤島・浦松の諸兄が第一輯を企画されて、山小屋、山案内等の資料が少し集められた頃から、お手伝いを始めたのであるが、今日まで山日記が数年戦争によるブランクがあったにせよ、多くの人々の努力によって、よくリレーされ、編纂されて来たことを、心より欣び、感謝している一人である。『山日記』の探検時代ともいうべき一九三〇年より数ケ年は、ほんとうに、小島烏水さんの『日本アルプス』ではないが、色々な面において開発時代であったと思う。『山日記』の種本となったのは、スウイス山岳会、独逸山岳会発行の二冊の『山日記』であったが、今日の内容を見れば、はるかにJACの山日記が充実し、すぐれているものと信じている。

当時は山岳高度表にしろ、峠の高度表にしても決定版は出来ていなかった。木暮さんの調査されていた資料を基礎として、樺太から朝鮮・台湾まで、五万分の一の地図を一枚々々たんねんにカードに書きとり、整理したのであるが、山の呼び方にも異論があり、高さが〇・一米違っても読者よりお叱言があったり、文字通り机上探検時代であった。

山小屋、山案内の調査が最も時間と手数を要したページであったろう。毎年数百通の調査表が各地に送られ、一葉毎の回答が積みあげられて今日に至ったのであるが、全国の山日記を心から愛好する人々の暖かい協力を今でもなつかしく想い浮べている。

（右は一九五三年版『山日記お知らせ』―その翌年から『山日記の栞』と題されて十数年続いたもの―に書かれた、発刊当時の貴重な証言でもあるので、角田氏を偲んでここに再録しておく。因みにこの小パンフレットは、当時の『山日記』編集委員村山雅美、林　和夫、雨宮淳三氏らの努力で作ら↖

新刊の本紹介

山と猟師と焼畑の谷

山田亀太郎
山田ハルエ　述

秘境といわれた秋山郷は、新潟県穴藤（けとう）から中津川（信濃川支流）を溯り、長野県和山や切明に到る数十キロの地帯で、集落が点在する。平家にまつわる話もあり、さる武人の一族の隠れ里の話もあり、菊の紋章の墓が出たともきくが、詳らかでない。

戦前は道路が開発されず、牧之の『秋山記行』で見るように、入るのも大変だった。本書は屋敷集落（昔秋山根元の村）に住む老猟師（大正元年生れ）とその妻（大正六年生れ）の体験談を収録し、一冊の本にまとめたもので、『焼畑の谷』『猟師の家から猟師に嫁いで』『山と猟師』『猟師とけものたち』『夫妻の昔話』の五章、約百篇より成る。

話者の亀太郎は積雪季には熊をとり、他季節は農と木挽を業としてきた。三十八歳で右目を失ったが片目で猟を続け、「カカや子を養っているからやめるわけにはいかねえんだ」といって、更に二十年以上に及ぶ。それは焼畑づくり田圃開拓、木挽などとともにきびしい生活を物語っている。と同時に、その環境にくじけない強さと、屈託のなさは、むしろ微笑ましさを誘う。彼の猟のテリトリーは鳥甲山笠法師雑魚川の奥だが、時には山越えで発哺や熊の湯に出かけ「ウサギ一羽で一晩宿賃」などの話もあるし、岩魚を売った金を小赤沢のバクチで負けて、祭の赤飯が出来なかった話もある。熊とりの方法や取った後の処理配分

〉れたもので、現在繙いてみると、各号に短かいながら貴重な文章が多いが、現在全部揃って所持している人も少なく散佚の憂目にあっていると思うので、敢てここにのせた次第である。

なお細かいことだが、戦前のJACルームは不二屋ビルの三階で、四階とあるのは角田氏の思い違いか印刷上の誤植である。

（望月達夫）

第二十六回 有志閑談会

昨年行なわれなかった有志閑談会が、六月十六日午後二時から早稲田大隈庭園内の完之荘で開かれた。

本会創立当時の雰囲気をかもし出す「清水谷皆香園時代を偲ぶ会」としてこの集りが戦後最初に開かれたのは昭和二十八年六月十四日駒込六義園で、この時は高野鷹蔵、鳥山悌成、武田久吉、田部重治、中村清太郎、近藤茂吉の各在京名誉会員、そのほか冠松次郎氏ら二十七名の会員が出席されている。

そのうちすでに十七名の方が物故されているが、この集りは神谷恭、岩永信雄、成瀬岩雄氏らのご尽力のたまもので、昭和三十四年六月から再び有志閑談会の名のもとに開かれ、第十七回まで六義園心泉亭、その後、人数の都合で昭和五十年六月の第十八回が後楽園涵徳亭、昭和五十二年第二十回から完之荘に移り今に及んでいる。今年は第二十六回に当ると思う。

完之荘というのは飛騨白川郷の民家をそっくりもってきた風雅な建てもので、こうした集りにはうってつけのところである。この集りは今後も永く続けて行きたいものである。

出席者 島田 巽、山崎金次郎、望月達夫、鶴岡元之助、松本熊次郎、今井喜美子、金坂一郎、関根吉郎、今村正二、鈴木正俊、近藤信行、近藤 緑、松田雄一、坂倉登喜子、斉藤かつら、浜野吉生、山村正光、菅野弘章、松家 晋、高橋晋作、岡沢祐吉、横山厚夫、平井吉夫、鳴原啓佑、泉 久恵、滝川 清、名児耶達男、（世話人）山崎安治、織田沢美知子

なお次回世話人は山村、平井、泉の三氏にお願いした。会場の定員三十名という制約があり、出席者への連絡に苦労するが、来年、是非出たいと思われる会員は次回世話人に早目に申し込まれて下さい。

（山崎安治）

トニー・ハーゲン博士 ネパール政府より叙勲

スイスの地質学者であり、ネパール・ヒマラヤの研究家として知られるトニー・ハーゲン博士は、なども面白いし、物の不足時代には弾丸も手製だったという。この生活の知慧は農にも働いていて、斜面の土地に「一人で田圃掘った」次の方法に感心させられた。先ず大体平らにし、二つの瓶に水を入れてそれを一本の長いホースでつなぎ、一つの瓶を田圃の真中に据え、ほかの一つを持って歩く。平らなら水は動かないが、低ければ水が上がり、高ければ水が下がる。これが田を平につくる方法であった。

戦前の話もある。便所に使う紙がなくてカクマという草を採って干したのを使った話、家の中といっても畳は無くて莚だった話、お産の時布団が無いから藁屑の上に産み落し、子供の背中に藁屑がつく話など『秋山記行』そのままである。トチ餅作りもずい分手数がかかることを認識させられる。

ともかく数百頭の熊を取った主人公の話は興が尽きない。その話し方も微細に亘り、且つ要点を逃さない。但しこれには編者（きき手）志村俊司氏の手腕が大きく物を言っている。編者は昭和五十七年八月～十一月、通算二十日間話をきき、五十八年もう一度入郷している。筋道の立たない話を録音し、テープは三十巻を越えたという。

言葉の重複や場面の繰返しを整理して、一冊にするのは骨の折れたことであろう。文中に註もあるが読む邪魔にならないようになっている。別に詳しい註と写真もある。編者は苦心してまとめたこの本の、表紙にも扉にも話し手の名を掲げたのみで、自分の名を出していない。僅かに奥付にあるだけで、その遠慮深さに敬服する。雪山、山村、猟などに興味を持つ者にとって魅力のある本である。

余談で恐縮だが、本書に登場する上ノ原の熊狩猟師山田義松は、昭和十五年の春、私と故原全教さん（元会員）が鳥甲山や佐武流山へ登った折、佐武流山へ同行した者である。

四六判 二七〇ページ 挿入写真八ページ 昭和五十八年九月 白日社刊 一八〇〇円

（川崎精雄）

アルプスの名峰 近藤 等 著

カヴァーを飾るエギーユの鮮やかな色写真だけでも蠱惑的な本だが、中身は濃厚でとばし読みを許さない。アルプス体験二十年が存分書きこまれているのだから当然といえる。北壁物語りばかり多かったが、本書で初めて現代アルプス登山の全貌がよどみなく伝えられた、と書きたい。貴重なリポートである。

とらわれない目でこれを書くのに著者は最適の人だろう。G・レビュファの山岳文学を本邦に紹介したあと、著者は四十一歳の晩学でシャモニーの国立登山学校に入門しカリキュラム登山を踏んで現代技術を身につけた。還暦を越す今日までの二十余年、アルプスを四ケ国の領域にわたり歩いて登頂の数は百を数えた。その中の六十五峰とこれから登りたい五峰を加えて「名峰」として選び、山群別に各ピークの山容、登攀史と主要ルート、それに自分の登攀体験を織りこんで如何にも現代登山を映すに似合わしいスピーディーな筆で書き下した。

登攀史とルートの説明が、登高者の心眼で選び抜かれた豊富な写真に助けられて面白い。現代登山の紹介と書いたが、歴史は古典から初まっている。現代の登り手を含めての登場人物は数え切れない。どの年代の読者もそれぞれに懐しい人物を見出すだろう。ピーク別登攀史の索引としてすぐ役立つにちがいない著者の細かな研究を感じさせ、邦人の業績も随所に述べられ本書を親しみ深くしている。

読んでいてアルプスは明るいなあ、と云う感慨にとらわれる。合理主義者で聡明な行動人である著者は、他の国の山群にはないアルプスの、古典殿堂を連想させる文化的魅力に惹かれたようだ。著者の山にむかう姿勢が印象的である。その時のトレーニング度と体調を考えて、山とパートナーを選

ネパール国王より、「ビレンドラ・プラジュニャランカール勲章」（外国のネパール研究者に対して贈られる最高勲章）叙勲の栄に浴し、五月五日王立ネパール学士院において授与式が行なわれた。

これまで同勲章を授与された者は、イタリアのG・トゥッチ氏、英国の文化人類学者ハイメンドルフ氏の二名である。日本にも多くのネパール研究家がおられるので、四番目の受章は是非日本人が受けられることを期待して止まない次第である。

（松田雄一）

第六回　丹水会例会

丹沢の鍋割山の麓の静かな寄（ヤドロギ）小屋で、五月二十六～二十七日の両日懇親山行が行なわれた。

年二回行なっているこの集いは、今年は山菜山行と重ったため大分参加者が少いものと思っていたところ三十名もの参加申込みがあり、年輩の方々は夕刻の懇親会が待ちきれず、早々から到着されたとか。小屋の昔なつかしいいろりを囲み青年懇ですっかりなじみとなった小屋の主人「サブちゃん」こと大館三郎さんの温いもてなしで、名物〝シシナベ〟や〝シカザシ〟が出され、酒はウイスキー、ショウチュウ、ワイン、日本酒、飛騨から、故人の折井さん縁の酒〝飛騨娘〟も持ち込まれ、いろりの火が時々煙を上げて燃えるなか、年齢、職業の違いを越えて話の輪は夜の更けるまで続いた。丹沢は皆若い頃に良く登られており、特に丹沢のパイオニアである石川治郎さんから、登山道の未整備の頃の話や、網蔵さんからは心臓病と山登りの話など、話に花が咲いた。また今回皆様から返ってきた会への意見をまとめて発行した〝丹水通信〟を、これからはテーマを丹沢にし、今昔の変遷など今でないと散逸するものも何とか記録しておこうなど、先輩諸兄からの提案もあった。

翌二十七日は天気も良く、小屋の前から見上げる山も高く、緑も美しい。メンバーを沢登り組と尾根歩き組に分け出発。沢登り組は最近非常に荒れているという滝郷沢へ、尾根の組は新緑が美しく、山深さを感じる雨山峠を経て桧岳へとたどり、山頂手前で昼食、秦野峠へ降って一休みののち宿へ戻った。

かつて表丹沢から裏丹沢へぬける主要路でもあった秦野峠は東側が開けた静かな峠で細々とした小径がふまれているだけであるが、最近この近くまで林道が延びていて、静かな寛きもあと少しの感がある。

宿の前では滝郷沢の組がF6までで時間切れとかで、既に酩酊中、次回の十一月の例会を楽しみ

富士講の歴史

岩科小一郎　著

原始時代の日本人が農耕生活を始めたころから、日本には原始神道にかかわる山岳信仰があったという。数々の伝説を残した役小角をはじめ多くの行者たちは、霊や神のいる山に入って修行をつみ、霊力や神道力を授って下界へ降り、一般民衆に加持祈祷をおこなったといわれている。

このようにして発展してきた山岳信仰も、大陸や海上を経て伝わってきた仏教、道教、キリスト教といった諸宗教の影響を受け、一つの教義を持つ宗教に育っていった。そういった宗教の一つに、ここでとり上げられる富士講があった。

本書は、こうして発展してきた修験道の行者の一人、長谷川角行が富士講の基礎をつくるところから本論を進めていく。そしてそれ以降の食行身禄、身禄の三人の娘、伊藤参行、小谷三志といった富士講の中心となった人物を、別派の村上派などと並行させて、数多くの資料をもとに浮かびあがらせ、二宮尊徳にも影響を与えたという不二道までの歴史を目の前にさせていく。そして富士講でいう「先達」、「御師」と呼ばれる人々が残していった祭具、家屋敷、現在も残っている富士塚、導者たちの身につけていたものなど、ひとつひとつ著者はこまめに考証していく。著者が見つけた古文書の中には一七六三年に富士山で遭難死した者の記録まである。何人かの遭難死した者の検死の記録には、事故死ではなく病死としたものが見られる。なかには今でいう高山病によるものもあったのではないかと思う。このころのヨーロッパは、モンブランへ登る者には賞金を出すとソーシュールが掲示を出していた時代だ。登山者が高山病にかかったのは日本のほうが先だった（?）などと考えると、この資料には別の面での興味も湧いてくる。

このように著者は原資料にまで遡って、粉飾のないままわれわれにその資料を提供してくれる。

ただここで筆者が言いたいのは、〝あとがき〟でも名前を上げている、著者の仲間の伊藤堅吉氏が協力した岩波書店発行の日本思想大系六十七巻所載「三十一日の切なものを指摘して鋭い。

また、マッターホルンの北壁で命を落した日本人の数は数十名に達する、残念なことだ、とむすび技術にすすむ余りに、判断力の鈍化を誘発し勝ちな現代登山の脆い面に眼光を当てているのも、今のアルプスの秀れた解説書としての本書の価値を高めている。

一九八四年四月発行　三三七ページ　山と渓谷社刊　定価二、〇〇〇円

（田口二郎）

び最高の充実感を手に入れている。

時にはシャモニー在の第一線の邦人と組み、戦前では熟練者でも容易に手を出さないような氷の急斜面を、しっかりした足取りで楽しげに攀じている。現代登攀技術の一般水準の高さをつくづく感じさせる。読者はこうした叙述からまた別のこと、すなわち、ひだまで登られているアルプスが益々豊かなプレイグラウンドになっていることや、ヒマラヤ時代といっても、新らしい技術、道具、理念、風俗をたえず生み出しているのは、昔変らず今でもアルプスであり、登山の本場であることに気がつくのだ。

アルプスに深入りしないと耳に止らぬ情報も書かれている。これは一例だが、ダン・ブランシュの北壁はマッターホルンの壁より一段格上と思われている、などアルプスについての知識を自家薬籠にしている書き方なので、適切な予備知識なしでは読み辛い面もあるようだ。それだけに適所に息抜きの所感を挿入しているのが良い。例をとると、困難なルートを如何に短期に登るかだけに専念する一部クライマーにくらべて、昔の先蹤者ははるかに感受性が強く、山を愛していたのではないか、とか邦人の一線の若者は歴史に無関心過ぎる、といった観察は、技術をすすめた現代登山が取り残した大

にして解散した。

（追記）

丹水会が小田急沿線の会と言っていた第一回から出席されていた網蔵さん（会員番号一八五三）が六月十八日急逝されました。例会では元気な姿で語っておられたのに、折井さんに続き残念です。心から御冥福をお祈りします。

出席者　近藤信行、鳥居　亮、大森薫雄、鈴木正俊、小林由美子、松田雄一、石井貞雄、石川治郎、網蔵志郎、山本正基、蜂谷　緑、田中千穂子、川上光久、山崎　健、加藤比呂志、神戸恵子、小川雅庸、村上賢二、三好まき子、菅野時子、千葉保之、込田伸夫、奈良洋子、渡辺恒美、織田沢美知子、古谷聖司、三栖寿生　（三栖寿生）

●第七回丹水会例会のお知らせ

本年は十一月最終土曜日が祝日と連休になりますので十七日～十八日で、道志山塊で行います。今回は山梨県の会員との交流を併せて行う予定です。

（連絡先）七五一〇　古谷聖司

大雪山黒岳一九八四標高年支部山行

北海道支部

山岳会創立八十周年、北海道支部十五周年、大雪山国立公園指定五十周年、大雪山黒岳一九八四標高年等のクレジット付き、支部山行参加者は、遠く名古屋、東京よりの参加もあり、七月十四日午後五時、層雲峡ロープウェイに集合。博物館の保田夫人に入山の挨拶を済ませ、ロープウェイ、リフトを乗り継いで黒岳頂上は、六時十分。留萌、空知の山地に夕日の紅芒が映える。六時四十分、黒岳キャンプ場に着くと、先行の集会担当委員心尽しの豚汁が待っている。少しアルコールが回ると、早速、北海道支部混声合唱団のハーモニイが大雪の山々に谺する。

翌十五日は、北鎮と北海両コースを経て旭岳へ。予定の三時十五分のバスは満員のため、ロッジでビールを飲む人、ラーメンを食べる人…。やや遅れて臨時便のバスに乗り込む。旭川の解散式はスナック『まき』で、ビールで乾杯。枝豆、おでん、お茶漬けで腹拵えし、ウイスキーの水割りとなる。

札幌への最終L特急ライラック24号は、山行に満足した山友の鼾を乗せ、函館本線を南下した。

参加者　三ツ石　清、松田雄一、水科行雄、三浦勝幸、三浦郁子、浅利欣吉、柳田凉子、亀井秀子、石崎貞子、加藤正己、梶原昭七、朝木大統、久保田優一、河村章人、河村皆子、赤石喜恵子、野口礼子、山川　力、平野　明、以上十九名

御伝」との関係である。著者は岩波で底本としたものは原典と違うとはっきり言っているが、そしてそれは正しいのだが、そのためにかえって、本書「富士講の歴史」が正当性を主張しているようにとれ、後日もっと大量の資料が出てくるだろうことを岩波版の本が示唆しているのに、本書がそれに応えた本だと素直に解してこれを読めないのである。もし岩波版のものからの独立性を主張するのであれば、最も重要な身禄の「三十一日の御伝」に、著者は特に註をつけないとしているのだが、今の根っからの東京生れの若者にも読めるよう、そしてこれが江戸庶民の文化であり、本書が活字となって残ることを考えれば、よりいっそう、著者の食行身禄に寄せる熱意をこめて「三十一日の御伝」に註をつけるべきだったのではないかと思う。

昭和五十八年九月十八日　名著出版発行　五六四ページ　定価六五〇〇円　（岡沢祐吉）

佐貫亦男のチロル日記

佐貫亦男　著

「最初にくれぐれもいうが、チロルへまっ先に入ってはならぬ。山は低く、とても初めてでは淋しくてかなわない。チロルの味がわかるのは、スイスやフランスのいわゆる西アルプスを歩きまわって食傷してから後のことである。つまり、チロルの山はかわいい山々である」

前著『佐貫亦男のアルプ日記』で筆者はチロルの章をこのように書き出していた。それから十年後に出版された本書は、文字通り西アルプスに食傷を感じた筆者の、低くて淋しい東アルプスへの転身物語であると同時に、チロル地方の山々にひそむ魅力を発見するに至る足と心の旅路の記録である。

「山が高すぎて人を近づけない西アルプスと違って、東アルプスでは山と人が隣りづき合いをしている」

世に名を知られた科学技術者である筆者が冒頭の章でしるしたこの文章が、いわば命題であって、本書全体はこの命題の証明をする役割りをになっている。そういってみたところで、本書はべつに幾何学めいた論理によって構築されているわけではない。かつて寺田寅彦がそうであったように、科学者ならではの視線と生活態度が、一般の旅行者や登山者にありがちな情緒一点ばりの紀行文とは一味も二味もちがった独自の境地を生み出している。しかも、科学者である必要のない自由な散策者として、足も筆も思いのままにおもむく。

「私は恐ろしい企みを考えてみた。それはKを誘って、命を落とさせる計画である。あの世で死んだら、この世へ出現する可能性がある。その場所は、東チロルのサルの谷がよい。そこは谷の地面がぬかり、歩いていると山靴が沈みこむ。私はここでなん度かそんな目にあって、これが私の最後の土地かと考えた」

このような文章はかつてアルプス紀行に書かれたためしがなかろうと思われる。どのような文脈でこうした文章があらわれるかは、読者となっておたしかめいただきたい。これまたチロルの魅力を探ってそれをかたろうとする筆者の表現手段の一つなのであるから。

四千メートルを超す山々は岩と氷河で武装して人間の生活の場であることを拒んできたからこそ、冒険にとむ登山の楽しさを満喫させ、近づきがたさが美の感覚を強めてきた。東アルプスにはそんな四千メートル峰は東南スイスのピッツ・ベルニナだけしかない。それよりずっと東のオーストリアとイタリア領南チロルにまたがる三千メートル級の山々の世界は、ずっと低く淋しい。山と人とが接近しているこのあたりで、なぜ淋しいと筆者はいうのだろうか。心なごませる人情も欠けてはいないのに、なぜ淋しいのか。それは人間がつねに死に近づきつつあるからにほかならない。この淋しさを感じとる筆者は、チロルの山と谷を逍遥して暖かなまなざしでそこに

☎ 234-6659
この電話でもお知らせしています

●例会講演会

日時　九月二十七日午後七時より
場所　本会集会室
演題　ペルー
〝コルディエラ・ブランカの東〟
講師　児玉茂海外委員
（今夏、当地を訪れた児玉委員のホットなお話です。会員の方で興味のある方は是非お越し下さい）

＊

海外委員会

●十月会員懇談会

演題　「ラダック巡拝の旅」
スライドと講演　山口一孝氏
日時　十月十五日（月）
午後六時三十分
場所　本会集会室

＊

総務委員会

●図書交換会

日時　十月二十七日（土）午後二時より
場所　本会集会室
出品締切日　十月十五日（月）
申込先　図書委員会まで
東京近郊で多数出品される方は委員会で戴きに伺います。地方の方は宅配便をご利用下さい。
◎ここ数年当日の参加者が定着しているようですので、初めての方を特に歓迎します。奮ってご参加下さい。

＊

図書委員会

●秋山山行
——共催　山形支部

日時　十月五日（金）～七日（日）
場所　山形県摩耶山
集合　五日（金）午後八時半
新宿スバルビル前
会費　会員二万七千円　非会員二万九千円（往復バス代、一泊三食、飲み物付）
持ち物　シュラフ持参
宿泊場所　関川　金沢小屋
〈秋山山行写真交換会〉
日時　十月十七日（水）
場所　本会集会室　十九時より
会費　五百円

●きのこ狩り山行

日時　十月十九日（金）～二十一日（日）
場所　志津倉山
集合　十九日（金）午後十時半
新宿スバルビル前
会費　会員二万六千円　非会員二万七千円（往復バス代、一泊三食、飲み物付）

生きる人々を観察する。これが本書に人間的なぬくもりをあたえている。

以上が本書の大きな特徴であるとすれば、小さな特徴の一つとして興味深いのは、地名に対する筆者の関心の向けかたである。トレルンテ・アルトを高瀬岳、ゲルプホルンを黄岳、レートシュピッツェを赤岳といったぐあいに、固有名詞の原意を日本語にしてみせているのは、カナカナの外国地名を日本の読者に紹介するにあたって心にくい配慮である。と同時に、パンション・エパッヒャーを語呂合わせでパンション一発屋としてみたり、フィルネウスを昼寝谷と呼んでみたりするあたりに、筆者一流のおおらかさがみてとれる。げに自由な境地で旅するヴェテラン山岳旅行者による、心ゆくままの随筆の極致ここにありというべきなのであろう。

B六判　二九四ページ　山と渓谷社　一九八三年刊　一二〇〇円

（宮下啓三）

ヒマラヤ文献目録
Catalogue of The Himalayan Literature
薬師義美　編

本書の初版は、十三年前の一九七二年十月、ヒマラヤ関係文献目録（私家版）として出版され、諸外国からも高い評価を博していた。この初版については「山岳」（第六十八年）図書紹介欄、一八一～一八四ページに紹介してあるが、この度本書の増訂第二版が、ヒマラヤ文献目録のタイトルで、白水社より出版された。

五〇〇部限定の初版は、私家版のこともあって半年程でストックがなくなり、その後内外より再版の出版が待たれていた。これら要望にこたえて、編者は三年程前から増補改訂の作業をはじめ、昨年四月までに入手し得たデータをもとに欧文図書三七五二点（初版は一九一六点）、邦文図書八五五点（初版は二五六点）を収録しており、ヒマラヤ、チベット、中央アジアの探検と登山を中心に、内容は格段の充実をみせ、初版の面目を一新している。

本書の配列は、欧文、邦文にわけて、著者別に配列されているので、索引には、使用者の便をはかる意味で工夫がなされ、邦訳書著者別一覧、邦文図書名一覧、欧文図書名一覧に区分されている。

初版の紹介のときにも述べたことであるが、収録している文献には、すべて英文で解説がつけられており、特に邦文文献については、この英文の解説がどれだけ海外の利用者に役に立っているか計りしれないものがある。

吉沢一郎氏から聞いた話では、ヨーロッパの某古書店では、ヒマラヤの本は薬師ナムバーでカタログに記載し、取引に利用しているとのことである。またアメリカ山岳会のニック・クリンチ氏は、使い古した本書の初版本を手にし、文字通り座右の書として、ヒマラヤの研究には欠かせないといっておられた由である。このように本書は、内外の多くのヒマラヤ研究家に重宝がられていることは間違いない。

なお、邦文文献が五九九点も増えていることは、最近の日本のヒマラヤ登山の盛況ぶりを物語っており、日本のヒマラヤ登山の紹介にも大きな貢献をしていることと思われる。

なお著者は、序文の中で、集大成と自認しているものの、実際には手にして見ていない図書も多く、完璧にはほど遠い、と述べておられるが、吉本嘉規著「アフガン・ハウンド」（新ジャーナル社刊）の文献は、「愛犬ジャーナル」を出している出版社から出ている犬の本であり、むしろ未確認のものは収録しない方がよかったのではないかと思われる。

いずれにしても七五〇ページを越える重たい本を手にして、今更ながら著者の努力に敬意を表した次第である。高価な本ではあるが短期間に品切れになるものと思われる。迷わずに購入することをお薦めする次第である。

B5版　七五九ページ　一九八四年一月　白水社刊　定価一九、〇〇〇円

（松田雄一）

▼今回は喜多方市在住の矢田目昇氏の全面協力で行います。

〈きのこ狩り山行写真交換会〉

日時 十月三十一日（水）

場所 本会集会室 午後七時より

会費 五百円

以上の申込は事務局・集会委員会まで

集会委員会

＊

●シンポジウム「ヒマラヤのエコロジー」

第三回のシンポジウムを次のように開催することになりました。会員各位の参加を期待します。

日時 十月二十七日（土） 午後一時～八時

場所 渋谷区神南一ノ一九ノ八 勤労福祉会館（462-2511）

パネリスト 金井弘夫、川喜田二郎、高遠宏、滝口正三、中島暢太郎、春田俊郎の六氏は決定。海外出張からの帰国を待って、次の三氏のうち二氏をお願いする予定です。五百沢智也、小野有五、渡辺 桂（国際協力事業団）。

趣旨 地域としては、カラコルム・ヒンズークシュまで含め、全ヒマラヤを扱いたく思います。「エコロジー」という言葉をあまり動植物中心に狭く捉えず、人間社会の文化から気候・地質まで幅広く大自然とその中の人間という風に捉えてゆきます。

問題発掘を主眼とします。(A)どんなエコロジカルな問題が存するか？ (B)どんな事実がまだ不明か？ (C)どんな社会問題につながるのか？ (D)たまたま現地を訪れる登山家・トレッカーは、今後何を調べてくれば価値が高いか？

全体として楽しく、ロマンを求める集いにしたく思います。フロアーからの発言歓迎。なお、間に合うなら、今まで日本人で、ヒマラヤにつきこの主題をめぐり寄与した専門家のリストをお配りしたいと思います。予稿集も配布予定。

会費 二千円（予稿集こみ）

世話人 川喜田二郎

科学研究委員会

＊

●紅葉会案内

日本山岳会静岡支部主催の紅葉会も本年で二十七回を数えることになりました。また今年は日本山岳会創立八十周年の目出度い年でもあります。本部の記念行事も多々計画されているようですが、支部においてもこれに呼応して、今回の紅葉会は記念晩さん会を兼ねて盛大な野外焚火パーティを企画しております。

場所は由比町浜石岳の静清庵青少年野外活動センターです。前夜祭は駿河湾産の桜エビ、シラスと芋煮を肴に地酒の飲み放題、食い放題ということにします。

翌日は駿河湾から富士山、南アルプスを一望できる浜石岳（標高七〇七米）に登り、興津に下ります。興津承元寺でみかん狩を楽しみ、そこで解散します。時間の余裕のある方は、東海道随一の名勝薩埵峠の夕景を眺めるもよし、興津清見寺参りをするのも一興かと思います。

実施要綱は次のとおりです。

場所 由比町浜石岳 静清庵青少年野外活動センター

国鉄由比駅より徒歩二時間、タクシーで十五分（自費・相乗り推奨＝タクシー料金は由比駅より千五百円程度）

日時 昭和五十四年十一月十日（土）、十一日（日）

会場集合 十一月十日 十六時三十分

宴会開始 十七時三十分

なお当日十四時～十五時の間は由比駅前で案内いたします。

国鉄連絡

東京→三島→由比←静岡←大阪

（下り）12：43→14：00

13：49→14：30

14：16→15：06

14：18→蒲原 16：48 タクシー

（東海三号）

（上り）13：52←13：31

14：27←14：05

14：57←13：34

なお東名高速の場合、東京からは富士I・C、名古屋からは清水I・Cでおりて下さい。

会費 七千円（子供は無料）

申込み 葉書で十月十日までに左記に申込んで下さい。案内状を送ります。定員六十名に達し次第締切らせていただきます。

振込先 郵便振替口座 名古屋九―五〇八五六 〒四二一―〇一 静岡市寺田四〇―六・日本山岳会静岡支部紅葉会・杉本宜明（〇五四二―五九―七七〇七）。

会費の振込をもって正式の参加申込といたします。

静岡支部総務・安間 荘

＊

●山の気象講座開講

山登りに気象のことが重要なことはいうまでもありませんが、今回は天気図の見方、書き方といったことより、もう少し原理的なこと（例えば雲のでき方、風の吹き方、雨のでき方など）について勉強会を開きたいと思います。本会会員で気象の専門家の大井正一氏に講師をお願いしました。同氏の女子短大などでの講義の経験を生かして頂き、やさしく、素人にわかるようにお話し頂くようお願いしました。

講座の予定題目はつぎの通りです。（時間は原則として午後六時半より約二時間）

第一回 十一月八日（木） 十種雲級の見分け方、高低気圧との関連性

第二回 十二月六日（木） 雲の変種、地形雲、空模様による天気判断の基本

第三回 一月十日（木） 気圧と高さ、上昇気塊の温度変化

以下 毎月一回（日時未定）。二月、大気の垂直安定度、雲の発生条件。三月、雲、雨、雪のでき方の物理、樹氷、雪崩など。四月、風の高度分布、温度風、ジェット気流、ヒマラヤ。五月、大気大循環に伴う問題、世界の山の気候。六月、低気圧の主体構造、上層天気図の見方。七月、天気予報、台風雷、遭難例。九月、衛星雲写真の見方、遭難例。

教科書は、新版気象学概論 山本義一著 朝倉書店 二〇〇〇円（各自購入）を使いますが、必要に応じて参照する仕方でやります。高校程度の数式がでてきても、数学の基礎は必要ではありません。質問、討論に十分の時間をとりますので、どなたでもふるってご参加下さい。

準備の都合がありますので、参加ご希望の方はなるべく早目に（締切十月末）、当委員会宛、住所、氏名、連絡電話番号をおしらせ下さい。会員外の方も会員の紹介があれば受付けます。

聴講料は未定ですが、講師謝礼、資料代などとして若干頂くことになるかもしれません。

科学研究委員会

＊

●ネパール・ヒマラヤ 登山新規約コピー

このたび会員の松田雄一氏のご好意により、ネパール・ヒマラヤに関する登山新規約の英文コピーが入手出来ました。コピーご希望の方は事務局に保管してありますのでご利用下さい。

高所登山委員会

◦会務報告

七月理事会

7月9日　午後6時30分　本会ルーム

出席者　佐々会長、田口、山田副会長、神崎、大倉、西村、赤松、松家、水野、鈴木、長谷川、絹川、村木、梅野、高遠各理事、松田、竹田各監事、宮下、鴫原、山口各評議員

委任・欠席　田村、河村、平野、平井、皆川各理事、飯野、中村各評議員

○八十周年記念事業について

△行事分科会関係

西武側と計画を交渉中

他に絵画の展覧会も検討している

△集会分科会

八十周年記念晩餐会の開催を六月十六～十七日開催の支部懇談会で支部の意向を聞き次の通りとした

開催期日と開催地　共催支部

十月二十七日（土）大阪　関西

山陰

十一月中旬名古屋　東海、岐阜、静岡、信濃、山梨

三月初旬福岡　福岡、北九州、熊本

五月連休明け仙台　宮城、福島、秋田、山形、岩手

六月十五、十六日長岡　越後

（地域によっては信濃支部の一部）

七月（確定せず）札幌　北海道

八月下旬富山　富山、石川

△募金分科会

七月六日現在応募会員数六四七名（会員数の一六・七％）、口数一四七三口、金額七百三十六万八千六六三円、会員の多くが募金の使い方に関心をよせているので、具体的作業（予算案作成）を早く行うこと

会務報告

△カンチ登山隊関係

報告会を七月三十日午後六時自治会館ホール（市ケ谷）で開催、当日レポート（報告書）を販売予定

カンチ写真展を七月二十一日より二週間西武本店スポーツ館で開催、「協力　日本山岳会」とする。

テレビ放映八月八日、日本TVで行われる

遠征写真パネルを二〇～三〇枚作成し諸行事に活用したい

△IMFの会合は検討したが該当者がなく不参加

△UIAAの会合が十月二十、二十一日韓国で開催されるので会長参加予定、なお会合の帰路ペール観光局長、ドイツ山岳会会長等が来日予定なので歓迎会を開く予定

△中国より史占春氏一行が来日されるので歓迎会を七月十九日開催予定

△東海支部ボゴダ遠征に東京より三名学生が参加するので学生部経験OB中心に有志でカンパしたい（目標三十万円）

△故折井会員の遺稿集発行に当り「山岳」「山」掲載記事の転載とJACマークの使用の依頼があり了承する

△オルゴール「グリンデルワルトリード」を六〇個購入し会斡旋品として販売したい

△「植村直己君に別れを告げる会」が行われ当会より多数が参列した

△北海道支部長後任に橋本誠二氏が決定した

△財務状況に関し報告があり収支順調に推移している

△学生部カナディアンロッキー登山隊（七月二十五日出発）承認について　了承

△その他　各委員会報告が行われた。

◦ルーム日誌　七月

3日（火）　指導委員会
9日（月）　理事会
11日（水）　山研委員会
16日（月）　図書委員会
18日（水）　フィルム委員会、三水会
19日（木）　山岳編集委員会、史占春氏歓迎会
20日（金）　科学研究委員会
26日（木）　会報編集委員会
30日（月）　カンチェンジュンガ委員会

今月の来室者320名

会員移動

支部変更

8347　松井　哲雄（東海へ）

終身会員

7703　菅野　弘章

改名

9145　斎藤　冬喜→節将

八十周年記念事業募金応募者ご芳名（昭和五十九年七月三十一日まで、敬称略、順不同）

（一八口）山田二郎（東京）（追加八口）（二〇口）今西錦司　今西寿雄　後藤幹次　西堀栄三郎　若林啓之助（一六口）宮下秀樹（追加六口）（一〇口）原　真　藤島　玄　堀田弥一　日下田　実　山口健児　皆川完一　近藤信行　百瀬舜太郎　小西政継　藤平正夫（追加九口）（六口）春田俊郎　村木富士　絹川祥夫　尾崎徳郎　柴田厳太郎　松家　晋　小倉茂暉　前田宗寿　中尾佐助　近藤　等　板倉勝正（五口）風見武秀　（四口）武田満子　五十嵐俊治　坂本正智　斎藤平七　奥原教永　今井喜美子　小倉董子　沼倉寛二郎　田中弘美　中島正夫　佐藤一栄　松丸秀夫　平井忠兵衛　（三口）笠原潤二郎　中世古隆司　渋川昭市（二口）今村正二　風間新作　高橋定昌　榎本　進　田中仲治　小林重吉　横田春雄　若林妙子　錦織保清　川北昌博　市川次良　余部守男　百瀬一茂　篠辺立男　垣内康時　大味精司　佐々木輝実　谷口現吉　木村康雄　沢井貞夫　久我良房　平野　勲　山縣一雄　高橋晋作　桑田　結　小野口道男　岩瀬　浩　浜口欣一　二塚謙三　兼山信次　原田武司　石井忠雅　江村真一　小林　碧　田辺恵造　香月慶太　入谷浩右　古市義孝　安土武夫　篠田勝久　下山　寿　吉川正幸　友野正雄　城戸邦夫　和田民子　大島民義　杉本義信　神谷哲夫　作見　徹　高橋　聰　水野勉　宮下啓三　安彦六郎　関口　敏　梅津　博　宇田川允敏　林原健三　井上富重　（一口）三宅正太郎　三宅次郎　杉山善三　川久保芳彦　金坂一郎　表　弘　林　清　安藤　治　西郷正郎　佐藤泰彦　浅山貞郎　小早川又一　山田一介　鈴木正俊　菊地文雄　森　勲夫　吉井洋之　灘波　清一　柴田篤志　渡辺恒美　坂井久光　斉田貴典　山口道弘　村松紀夫　荒木吉栄　町　俊一

図書受入報告

図書委員会

昭和59年4月分受入図書

1. ロナルド W. クラーク著　杉田　博訳「大登山家の歴像」現代旅行社　1983（版元寄贈）
2. 日本グループ・ド・オートモニターニュー & グループ・ドボエーム「Sanituary Report '81」1981（住吉仙也氏寄贈）

5月分受入図書

1. 羽賀正太郎ほか編「日本の名山1　大雪・日高と北海道の名山」ぎょうせい　1984（版元寄贈）
2. 江本嘉伸訳「ルンタの秘境　いま最も人間的チベットを探る」光文社　1984（版元寄贈）
3. 越後三山岳友編「エアリマップ越後三山　巻機山　守門岳」昭文社　1984（版元寄贈）
4. 「山岳マップシリーズ　中部山岳国立公園　北アルプス南部」北海道地図　1984（版元寄贈）
5. 牧野文子著「イタリアの山を行く」アディン書房　1984（牧野四子吉氏寄贈）
6. 串田孫一著「山と別れる峠」実業之日本社　1984（版元寄贈）

（以下次号）

柴山八郎　尾崎千代一　山口　亮　斎藤　晋　福田泰三　千葉保之　村上慶三　兼平治水　小駒山人　河西俊郎　高橋　功　村上　巌　小林義明　鈴木章　森田　茂　門脇愛子　上野善宣　小堀一政　田中重輔　森沢堅次　高田誠　加藤盛一　小出　清　柴田嘉彦　白根　一　篠原千秋　勝山康雄　村田正春　井上一男　仲村恒明　斉藤啓助　遠田　栄　遠田篤子　小林義明　蓬田時男　金沢守恭　越智英夫　望月　力　蓬田三枝子　安藤昌宣　高田　誠　清野清彦　豊島　卓

応募会員数累計　一、〇〇一名

応募口数累計　二七六三・五口

金額累計　一三、八一七、六六三円

あとがき　今夏、北アの山小屋で一人横になりながら、窓いっぱいに広がる東側の青空を眺め、夕陽に輝きぐんぐん生長するまっ白な積乱雲を間近かに見ましたが、いつもはそこに黒煙を引きながら落ちていく戦闘機を思い浮べていたのに、いつのまにか雪をいただく六、七千メートル級の山々を思い浮べるようになり、時代の移り変りを感じました。（O）

昭和五十九年九月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　法人社団　日本山岳会
発行者　佐々保雄
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂